2019年05月31日 中日新聞 朝刊 31頁

引きこもり 高齢化困窮

川崎市多摩区でスクールバスを待っていた私立カリタス小の児童ら十九人が殺傷された事件で、自殺した岩崎隆一容疑者(ェ)=川崎市麻生区=が引きこもり傾向にあったことが明らかになった。福祉の現場では、引きこもりの子と高齢の親が困窮するケースは「8050問題」(親が八十代、子が五十代の意味)と言われる。専門家は「関係機関が連携し、継続的に関わることが大事だ」と指摘する。

川崎殺傷 「8050問題」支援必要

内閣府は三月、四十～六十四歳の中高年で引きこもりの人は六十一万三千人に上るとの推計結果を公表。若年層(十五～三十九歳、二〇一五年調査)の約五十四万人を上回り、長期化、高年齢化が進んでいることがうかがえる。

国は〇九年度から都道府県と政令市に相談窓口となる「ひきこもり地域支援センター」を設置。さらに一五年施行の生活困窮者自立支援法に基づき生活や就労準備などの支援も行っている。しかし職員の異動や、訪問支援に必要なスキルの不足で、関わりが途切れてしまうケースが目立つ。

こうした中で、高齢の親の介護や病気をきっかけにヘルパーらが自宅を訪問し、引きこもりの子がいることが初めて分かるケースが増えている。引きこもりの問題に詳しい愛知教育大の川北稔准教授は「おじ、おばの介護は容疑者が外につながるチャンスだった」と指摘。「様子を見るということが放置にならないように、ヘルパーやケアマネ、福祉担当者ら多機関が連携しチーム会議で情報を共有できなかったか」と話した。

PC、スマホなし 容疑者自室

川崎市の児童ら殺傷事件で、自殺した岩崎隆一容疑者に最初に襲撃された保護者の外務省職員小山智史さん(三九)は、背中を刺されたのが致命傷だったことが神奈川県警への取材で分かった。

小山さんは背中二カ所と首、胸を刺され、背中から刺された傷が心臓まで達したとみられる。

県警は二十九日の家宅捜索で、岩崎容疑者のノートなど数十点を押収したが、動機や計画性をうかがわせる記述は確認されていない。居室にはテレビと複数のゲーム機があったが、パソコンやスマートフォンはなかった。

岩崎容疑者は小山さんを刺した後、児童の列にいたカリタス小六年栗林華子さん(一二)の首を刺し、保護者の女性(四五)を切り付けた。栗林さんは死亡し、女性は重傷を負った。県警は二十九日に小山さんの後、女性、栗林さんの順に襲ったと説明したが、捜査結果を踏まえ訂正した。岩崎容疑者を司法解剖した結果、首に二カ所の深い傷があり、死因は出血性ショックだった。

県内でも相談件数増加

静岡県内で、引きこもりの子どもなどがいる家族らの相談窓口になっている「ひきこもり支援センター」(静岡市駿河区)への相談件数は増加傾向にある。

センターでは臨床心理士や保健師の資格を持つコーディネーターが電話、対面相談に応じている。二〇一八年度は千八百五十一件の相談があり、うち家族からが六割を超える。引きこもりの人が対面相談に移行したのは三百四十人で、年代別では二十代が百十六人と最も多いが四十代以上も約二割の八十四人に達する。

センターは東部と西部にも拠点があり、本人のカウンセリングのほか、家族が引きこもりの実情を学び、交流する「家族教室」も実施している。県内五カ所で、支援者や同じ引きこもりの人とともにゲームや料理などをし、社会参加を促す「居場所支援」もする。

センターを所管する県精神保健福祉センターの担当者は「家族の相談で事情を把握し、その後に同行支援に移るケースが多い。まずは電話相談してほしい」と話す。

静岡、浜松の両政令指定都市は独自に相談窓口を設けている。一八年度に対面相談したのはそれぞれ二百三十四人、二百人。このうち、浜松市では三十四件が四十歳以上の引きこもりだった。(西田直晃、松島京太)

静岡県内の引きこもり相談窓口の電話番号

ひきこもり支援センター
054(286)9219
月～金曜の午前10時～正午、午後1～3時

静岡市ひきこもり地域支援センター「Dan Dan(だんだん)しずおか」
054(260)7755
火～土曜の午前9時～午後5時

浜松市ひきこもり地域支援センター
053(457)2709
月～金曜の午前8時30分～午後5時15分

安全確保へ 県が新組織

川崎市の児童ら殺傷事件などを受け、静岡県は三十日、児童の事故・犯罪被害防止に取り組む「子どもの安全確保対策会議」を発足した。関係部局が安全策を取りまとめ、早ければ六月の補正予算案に反映させる。

事件がスクールバスでの送迎時に起きたことを受け、県教委の担当者は県内の特別支援学校の送迎体制を報告した。六十六台のバスを二千二百人が利用しており、非常時には添乗員が携帯電話で、県警や学校に連絡するようにしている。県警生活安全部は通学路への防犯カメラの増設や非常時の連絡手段の多様化に言及した。川勝平太知事は「もっとできることがあるという気持ちで、スピード感を持って取り組んでほしい」と語った。

栗林さんチェロ恩師

亡くなった栗林華子さんとの思い出を語る佐藤明さん=30日、神奈川県逗子市で

川崎市の児童ら殺傷事件で亡くなった東京都多摩市の栗林華子さんは長年、自宅近くにある音楽教室でチェロを習っていた。教えていた神奈川県藤沢市の佐藤明さん(六四)は「とても明るくて、ゆかいな子でした」と声を落とした。

佐藤さんによると、栗林さんは三歳から今年三月まで週一回、教室に通っていた。レッスンの際には、よく冗談を言って周りを和ませた。

いつもかばんにお菓子を入れていて、五年生のときに、佐藤さんが「ちょうだい」と言うと、「いいよ」と板チョコの包装をむき、「親切だな」と思っていると、半分以上を自分が食べてから、残りをくれるような、ひょうきんな一面を持っていた。

佐藤さんは「カリタス小に通っていたことは知っていたので、事件後に気になり、(華子さんの)お母さんにメールをした。亡くなったと聞きびっくりした」と振り返った。

二十九日夜には、栗林さん宅を弔問。華子さんは「穏やかな表情で、眠っているようだった」と話した。

「明るく、ゆかいな子」

(c).中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています